獣害研究最前線－フィールドワークの様子－

地域資源工学研究領域 資源評価ユニット上級研究員 成岡道男

イノシシやシカなど日本国内の比較的大きな野生動物は「わな猟」及び「銃猟」で捕獲されています。「わな猟」には、① エサでおびき寄せて罠にかける「箱わな」や「囲い罠」、② 獣道（野生動物の通り道）に仕掛けたワイヤーで捕る「くくり罠」があります。一方、「銃猟」では、散弾銃又はライフル銃を使用し、単独又はグループで獲物を捕獲します。今回は、本州で一般的な「銃猟」であるグループ猟「巻き狩り」を紹介します。

「巻き狩り」は、勢子（獲物を追い出す役回りの人）が猟犬を使って獲物を追い立て、事前に予測した獲物の逃げ道に配置したタツ（追い出された獲物を仕留める役回りの人）が仕留める猟法です（図1）。猟犬には GPS 発信器が取り付けられており、勢子が持つ受信機に映し出されている地図上に猟犬の位置が示されています。この地図情報をもとに、勢子は獲物がどのタツに近づくかを予想し、無線機で知らせて獲物を仕留めます。猟は日の出の時間にスタートし、獲物の回収・解体までを含めて、だいたい昼頃に終了していました。仕留めた獲物は参加者全員へ等分に分配され、猟犬にも骨や屑肉が与えられます。

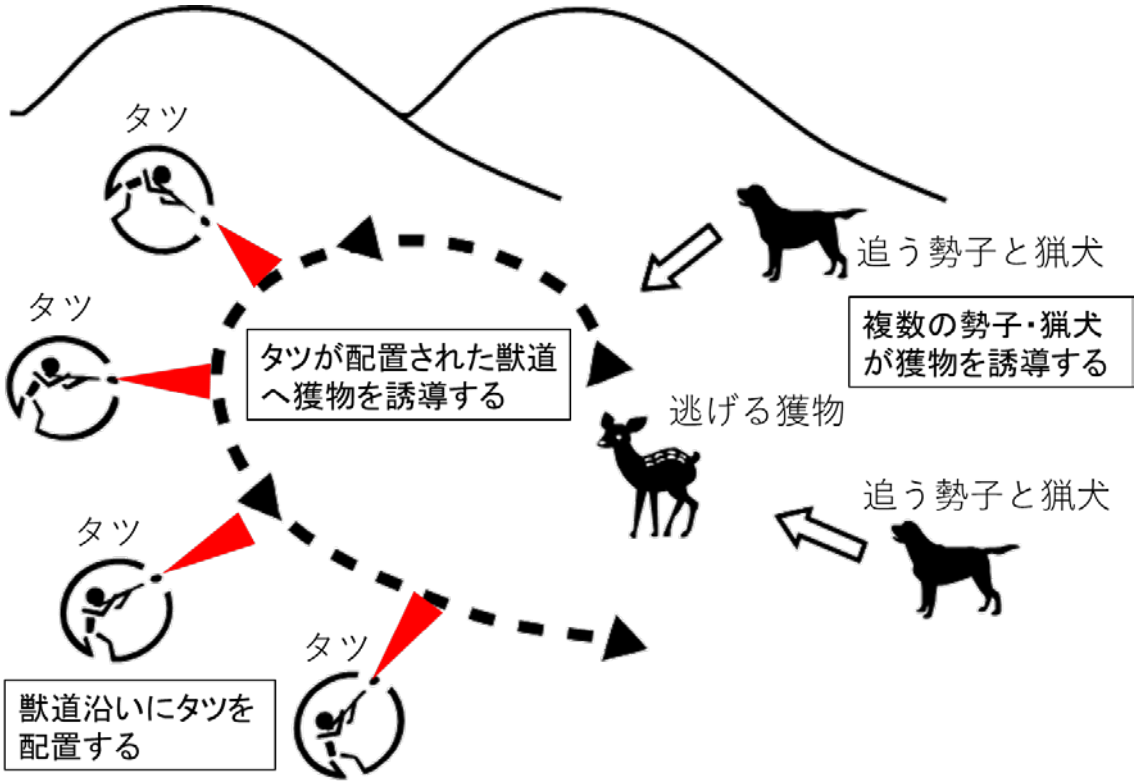

図1 巻き狩りの概要

「巻き狩り」は古くから行われている猟法であり、GPS や無線機の導入など最新の技術を取り入れて進化して来ました。しかし、「巻き狩り」で捕獲された獲物の食肉利用率は1割程度と言われており、捕獲鳥獣のジビエ利活用が叫ばれる中、食肉利用率の向上が求められています。また、猟銃による事故も後を絶ちません。

この猟法の改善には、参加するタツの行動やグループでの活動内容を記録し、分析する必要があります。このため、ウェアラブルカメラ（写真1）を装着した状態で「巻き狩り」へ参加し、参加者の行動を映像で記録してきました。

「巻き狩り」の状況ですが、山中を何 km も歩くことがありますし、ヤマビルやダニ、ブヨなどの吸血性の虫がたかってきます。土砂降りでも中止しませんし、雪が積もっている場所で何時間も待ったあげく何も捕れずに帰ったこともありました。その上、現場には「クマ出没注意」の看板がいろんな所に掲示されています。「きつい」、「汚い」、「危険」の 3K 状態です。しかし、確かに楽しい。でも、その楽しさは狩猟仲間との共同作業の達成感や語らい、仕留めた獲物を家族と食べる喜びなど「レジャー」とは少し異なるものでした。現代では、この楽しさが理解されないため、狩猟者が減少し、それに伴って野生動物が増え、農業被害や林業被害が増加したのでしょう。

写真 1 ウェアラブルカメラ

写真 2 狩場の風景

写真 3 クマ注意の看板

写真 4 獲物（シカ）と猟犬